

イスラーム経済思想における

<所有>と<連続性>に関する考察

—— 所有的市場社会の

ディレンマとの関連において ——

白 川 勉

I 序

今日、イスラーム世界で展開されつつあるイスラーム的世界観、価値体系の復活の試みは、その地域の政治、経済、文化のあらゆる分野で見い出している。イスラーム復興の本源的エネルギーが、もともと、精神生活と物質生活の二分化にたいするアンチテーゼであることを思えば、そうした多分野に及ぶ展開はむしろ当然のことといえよう。このイスラーム世界における最近の傾向は、キリスト教的な二元化された世界観に基礎を置く、近代西欧の価値体系との関係性のなかで、総体として捉えられるべきものであることはいわずもがなであろう。この点は、パーキルツ＝サドルがその経済理論を展開するさいに力説しているとおりでである。⁽¹⁾

本稿においては上記の点に配慮しつつ、イスラーム経済思想における〈所有〉に焦点をあてて、イスラーム経済思想、さらには、イスラーム思想総体との連続性について論じたいと思う。そのさいの出発点は、われわれは今日、資本主義思想と自由民主主義思想の間に理論的連続性を見出しえないという自己認識である。C・B・マクファーソンが指摘するように、市場社会における資本主義的諸権利と、自由民主主義理論における政治的義務は、本来、近代所有理論の演繹法によってのみ平等の公準の連続性を維持しえたのであった。すなわち、ジョン・ロックの所有理論は無制限の所有権を容認したが、自己の能力を超えて所有する人をその社会の唯一の構成員と見なすことによってはじめて、自由民主主義思想と整合しえたのである。⁽²⁾自由民主主義思想が、近代的所有理論をその自然状態において前提しているという意味では、今日の市民社会は不平等を基本的に含意している。なぜならば、ロックの所有権理論の演繹にさいしては、市場への従属の不可避性のみが平等を合理化していたのであるから。

無制限の所有が市民社会全体として受け入れ得るという図式は、今日にお

いては、もはや市場への従属の不可避性への不信と拡大された参政権の前に理論的基盤を失っている。資本主義的市場が本性的に有する加速度的拡散性の抑制、自由民主主義体制における政治的義務の凝集力の獲得・維持の同時達成は市場社会を前提する以上困難なのである。われわれにとって、〈公共性の問題〉が中心的課題となりつつあるのは、その意味で、むしろ当然のことと言いえよう。

所有的市場社会のディレンマの渦中にあるわれわれに対して、イスラーム経済思想は、近代的所有理論の演繹のさいの諸前提にたちもどることの重要性を指し示しているかのようである。イスラームにおける所有理論は固有の労働利得権原則と、貨幣と土地の自己増殖的資本性の否定の原則とに立脚している。そして、理論的整合性を保ちつつ明確に〈報酬〉と〈利潤の共有〉を区別するなかで、所有権と交換価値の分離を主張している。そこには、不平等の前提は見い出しえないのである。

特筆すべきことは、イスラームの所有理論がすでに社会（共同体）を所与として展開されている点であろう。イスラーム的所有理論は自然状態の概念を拒否する。このことは所有的個人主義の政治理論への移入という思考法を拒否し、政治・経済の同次元性を含意する。そこではわれわれが直面する政治的凝集力と経済的遠心力の問題は、社会の構成員のイスラーム性の向上とともに消滅するのである。

近代所有理論は17世紀の科学の唯物論的諸前提を受けついで誕生した⁽³⁾。その所有理論に立脚した近代的経済思想と政治思想がディレンマを克服できない状態にある。マクファーソンはわれわれがポスト近代に向けて、ホップズをロック以上に修正することの必要性を訴えている。イスラーム経済思想を学ぶことの意義は、われわれ自身の内にもあることを誰も否定しえないであろう。

Ⅱ 理論的連続性と法の位置

イスラーム所有理論の経済思想全体との連続性、さらには、イスラーム思想総体との連続性を決定付けるのは、法の先行性である。それによって、〈平等の公準〉はイスラーム思想総体の中で変質することなく、維持されるのである。しかし、近代西欧所有理論は、その演繹にさいして、自然法の平等公準に質的転換を要求したことを、われわれは明記するべきであろう。

本来、自然法思想の体系の中にあつては、個人的所有権はその制限を含蓄することによってはじめて権利たりえるものであつた。すなわち、資源の希少性の認識に立ち、生産においては個人の労働可能性が、また、消費においては生産物の損傷性が、無制限な個人的領有を制限していたのである。しかし、ロックは貨幣の役割の解釈と労働の市場商品性の主張により、個人の無制限な所有を可能ならしめたのである⁽⁴⁾。自然権にもとづく所有の概念は、この時点で明らかに保証されるべき権利から、処分しうる権利へと質的転換をとげるのである。その理論展開は同時に、貨幣と資本の同一視、労働と資本の対立的分化、労働の資本への従属性を肯定するものであつた。そして、自然法がよつてたつべき平等性と合理性の公準は、自然状態における不平等性の合理的前提化に貢献したのである。

この不連続性は、さらに自然権と自然法の市民社会への移入にさいしての、もう一つの不連続性と組み合わせられていく。ロックが想起した市民社会の成員は、明らかに個人の能力以上に所有する人達だけに限られていたのである。労働と資本の分化を肯定する所有理論が、労働能力以上に所有する人達だけを前提として政治理論へと演繹された。すなわち、ロックの所有理論は、今日の市民社会にあつては、政治的凝集力を弱める作用を本性的に有していたと云いうるであろう。

自然状態に関する、そうした資本主義的産業化社会の読み込みは、経済活

動に対する法の後続性を意味する。それに対して、イスラーム経済思想は明確に法の先行性を表明するものである。聖俗の分離を認めない、一元論的思想であるイスラームは、現世における理想的共同体の建設を共同体構成員全員に要求する。その手引きとなるものがシャリーア（聖法 *sharīʿa*）である。イスラーム的所有理論をはじめ、経済思想、政治思想等、イスラーム思想総体が、この法から導き出されるのである。イスラーム経済思想の三基本原理、(a)複合的所有の原理 (b)限られた範囲内での経済的自由の原理 (c)社会的公正の原理⁽⁵⁾は、この法の位置と一貫した目的性との関連で理解されねばならないであろう。

ロックは経済活動の目的を資本の蓄積に見い出した。しかし、イスラーム経済思想においては、その一元論的思考法に沿って、資本の蓄積をひとつの段階的目的としてしか捉えない。最終目標は適正な分配理論による共同体の精神的かつ物質的繁栄の実現とされるのである。分配理論を生産に先行するものと後続するものに分けて論じる点にも、ロックの重商主義的性格とは明確な差異が見い出されるのである。イスラーム思想における法の先行性は、所有理論と経済思想、そして、さらに経済思想と政治思想が連続的に結合することを意味する。総体としてのイスラーム思想は種々の個別領域の思想と調和し、社会の構成員にたいして、一定の方向性を付与するのである。

Ⅲ イスラーム的所有と資本・労働

近代所有理論における、労働と資本の分化、土地と資本の無制限所有の肯定は、貨幣の導入によって合理的とされた。その理論展開の過程で付加された公準は、労働の譲渡可能性と、生品の損傷性による所有制限の克服可能性

である。貨幣の交換手段としての側面は取引量の拡大を保証したのであるが、その非損傷性にもとづく蓄積手段としての側面は、所有概念を根本から改変したのであった。ロックの業績はここにある。

個人が生産しうる以上の生産は、個人が生まれながらにして所有する労働の処分権の合理化により可能とされた。契約による労働の処分とは、労働の商品化を意味するものであり、契約にもとづいて労働を購入する者は、その労働による生産品の所有権を主張しうるのである。そのようにして所有された、個人の消費能力を越える生産品は、貨幣に形を変え、貨幣の非損傷性が土地と資本に転換されるのである。先に述べたように、近代所有理論における自然法は、この時点で近代的産業社会を自然状態に読み込むことを合理化した。それゆえにロック以前の自然法と不連続なのである。

法が先行するイスラーム経済思想は、そうした無制限な所有権を容認しない。交換手段としての側面のみで貨幣の役割を限定し、労働の市場交換可能性を否定するのである。イスラーム的所有理論は、したがって労働と資本の分化、労働の資本への従属を生み出すものではない。イスラーム経済の理論展開は、労働利得権の原則に立脚して、一貫して労働を所有する人間の主体性の保持に裏付けられている。生産に先行してなされた労働は生産財の中に蓄積され、その労働を投下した人間がその生産財を所有する。生産活動は、資本中に蓄積された労働と直接的に投入される労働がともに費やされることと理解され、生産品の所有権は原則として直接労働の提供者に認められるのである。そこでの資本に関する理解は、生産を援助する立場にとどまり、資本中に蓄積された、生産に先行する労働の消費分に見合う賃料は保証されるものの、生産品にたいする所有権は認められないのである。

生産に先行して、労働が生産のための基本的物質（原材料等）に投下された場合、この基本的物質の所有権はその労働投入者に認められる。そして、この所有権は生産活動により基本的物質が完全に新しい別種の物質に生まれ変わらない限り、生産品の所有権は基本的物質の所有者に帰属しつづけるの

である。(所有権継続の原理)。そのさい、生産活動に新たに投入された労働にたいしては、イスラーム経済理論は、報酬もしくは、生産物の共有いずれかの道を契約によって選択しうるとしている。しかし、資本(生産財)にたいしては、生産物の共有を認めない。資本はその中に蓄積された労働の消費という資格において生産に関与するが、その物質的本性ゆえに直接的に投入される労働に対抗して、生産物の所有を主張しえないのである。

商業資本については逆に商取引にさいして一定の報酬を得ることを禁止し、利潤の共有のみが許される。なぜならば貨幣賃借は、貨幣の中にある労力を費やさないと理解されるからである。商業資本も貨幣に蓄積された労働の資格で商取引に関与しうるが、貨幣の非損傷性ゆえに、<蓄積された労力の消費分に見合うべき賃料>を主張できるものではないのである。この貨幣概念と資本概念は、イスラームにおける利子の禁止の理論的基盤へとつながっていくのである。

イスラーム経済理論は法の先行性のもとに土地の所有について公的所有、国有、私的所有の明確な規定を設定している。それによると土地の私的所有は、個人による国有地の一部活用、イスラーム化のさいすでに私有されていた土地などに限定されている。土地については基本的に用益権的思想に貫かれており、近代所有権思想とは明確に性格を異にしている。労働利得権の原理に立脚した労働と資本の概念付け、貨幣の役割規定は、この土地に関する複合所有の原理と連結されてイスラーム所有理論を形成しているのである。

近代所有理論と比較するさい、われわれはイスラーム所有理論の互いに関連しあう特質を、労働と資本の観点から次のように要約しうる。

- (a) 労働の市場商品性の否定、労働成果の帰属の集中排除
- (b) 土地の私有所有の制限による、労働成果の退蔵の排除
- (c) 貨幣の自己増殖性の否定と退蔵の排除
- (d) 資本と労働の同質的把握、資本の物質性ゆえの直接的労働への従属

これらすべての特質は、所有権と交換価値の分離の概念の中に有機的に反映される。それらは近代所有理論の諸前提にたいする否定なのである。すなわち、マクファーソンが分析する所有的市場社会⁽⁶⁾の成立基盤を、根底から再考することを要求しているといえよう。

イスラーム経済学が現実的処方箋を用意しつつある無利子銀行の理論基盤も、この所有理論における労働と資本の観点から理解されなくてはならない。利子禁止の思想的背景は単なる貨幣の退蔵の禁止にあるのではなくて、従来、貨幣によって決定づけられてきた労働と資本の関係性総体に及ぶものなのである。われわれが慣れ親しんできた、機会費用の概念は、近代所有理論に基礎を置いている。すなわち、機会費用は、個人の生産と消費の能力を超えて所有された財の余剰分が、貨幣を通じて資本へと転化しうる機会を先のばしするための費用なのである。別の表現をすれば、貨幣の非損傷性が可能にした、他人の労働を自己の資本へと転化させ、さらに他人の労働から得られる利潤を新たに所有するという連鎖を中断するための費用とも言いうる。

イスラーム所有理論は、こうした労働と資本の連鎖の可能性を前提において否定する。利子の禁止は、イスラーム経済総体との調和性のなかでこそ理解可能となるものである。イスラームにおける労働と資本の関係の特性は、分配理論の構築のし方と連続性を有する。生産に先行するものの配分と生産に後続するものの配分において、労働と資本の関係性は維持され、しかも、平等概念は先行する法が目的とする平等と等質である。ロックが所有権の演繹にさいしてとった、労働と資本の関係性の把握のし方も、なるほど資本主義的分配理論において維持される。しかしながら、平等概念は、演繹の前提とされる自然法が本来含意する平等とは異質なのである。

Ⅳ 経済活動の目的・人間観・世界観

イスラーム経済思想は、先行する法の平等概念を変質させることなく打ち立てられている。このことをわれわれは近代所有理論との対比によってより明確に理解しうる。法の先行性からして、それは当然のことである。したがって、イスラームにおいては経済思想と政治思想の間にも連続性が見出しうるのは、当初から予定されていたことであると言う人もいるであろう。しかし、われわれが直面している問題は、むしろ、なぜロックは所有権の理論展開のさいに、それまでの自然法思想における平等の公準の質的転換をはからねばならなかったか、という点にある。ロックが自然状態に近代的産業社会を読み込んでいたということは既に述べた。17世紀から19世紀にかけての社会の実体から出発して演繹をすすめた理由は何であったのかを考える事自体が、今日のわれわれに課せられた課題であると言えるのではないだろうか。

人間はあまねく、ホッブズが見たような功利主義的、所有的個人主義の傾向を有していると、われわれは理解すべきなのか、それとも、イギリスの功利主義的伝統の中でのみロックの業績は評価しうるかと理解すべきなのか。いずれの立場をとるかによって、ホッブズをロック以上に修正するという、われわれの進路は異なったものになる。イスラームがその思想総体に連続性を付与しうるのは、法の先行性にあると述べた。しかし、所有的市場社会のディレンマの渦中にあるわれわれは、さらに、イスラーム法の基盤である世界観、人間観から理解しなくてはならないと言えよう。ロックが演繹の前提とした実体が普遍性を有するか否かを理解するさいに、イスラームの総体的把握は、われわれに新しいテキストを用意するからである。

イスラーム経済思想において、生産は客観的側面主観的側面、の二つの側面を持っていると理解される。客観的側面は、経済学や自然学が目的とする自然法則を発

見し、人間がそれを統御するという側面である。主観的側面は思想の積極的役割が表出する側面である。イスラーム思想の目的とするものは、正義の実現であり、その意味において、自然の最大活用と分配の公正が重要視される。こうした生産に関する理解は、イスラームの人間観と密接に関連している。

イスラームにおいては人間は、神と土の間を常時揺れ動くものとして理解される。そして、信仰に基づいていかに正義を実現しようとしたかによって人間の質は決定されるのである。経済活動にあつては労働と公正な分配は信仰に基づいた行為なのである。先に見た労働と資本の関係、平等の公準の質的連続性は、こうした人間観に立脚している。また退蔵の禁止は、消費のための生産ではなく、自然の最大活用のための生産であることを意味している。利子の禁止は労働と資本の固有の関係を規定するのみならず、資本中に蓄積された労働を新たな投資に向けさせるという意味あいをも有するのである。

これらイスラーム的人間観に基づいた、経済活動の目的性は、本来的にはイスラームの世界観に立脚しているのである。イスラームの基本的世界観はタウヒード（一化の精神 *tawhīd*）と呼ばれる。タウヒードは、全ての存在は、その存在因を外に負っており、全ての存在因を遡及するところに神があるとする世界観である。すなわち、タウヒードの世界観は、神と自然、神と人間、自然と人間、そして、人間と人間の間関係性を一元論的に規定するのである。

このイスラーム固有の一元論的世界観は、現世における理想的共同体の実現を要求し、それゆえにイスラーム法の先行性と、それに併う、思想総体の連続性を要求するのである。われわれの関心事との関係でいえば、イスラーム経済思想と政治思想の間の平等公準の連続性は、このタウヒード観に立脚している。つまり、イスラーム所有理論も、この論理一貫性の中で、経済思想と政治思想と調和しているのである。

V 結び

所有的市場の遠心力、政治的義務の凝集力のバランスの問題は、個人主義的社會にあっては重大な関心事である。そこでは、常に公共性は、二つの相反する力の均衡点を中心として揺れ動くのである。所有的市場が不平等を本性的に含意している以上、市場性が放棄されうる程度に応じて、凝集力の問題は解決されるとマクファーソンは分析する⁽⁷⁾。しかしながら、市場を放棄せざるを得ないという結論は実体的でないと言えよう。むしろ、所有的個人主義を生み出す価値体系を見直すことのほうが近道であるかもしれない。つまり、近代西欧が押し進めてきた二元論的価値体系である。

最近の物理学、生物学における科学的進歩は、近代西欧の中に、一元論的思想体系を模索する動きを生み出している。科学革命と言われるこの新しい潮流は、本稿における、われわれの問題意識と無縁ではない。イスラーム経済思想が提起する新しいテキストは、われわれの直面する課題の解決に、十分貢献する可能性を秘めていると言いえよう。イスラーム経済思想をイスラーム思想総体とともに理解することは、とりもなおさず将来に向けて、弁証法の道を開くかも知れないのである。

注

(1) パーキルッ=サドル、『イスラーム経済論』 黒田壽郎・訳 37頁

(2) C・B・マクファーソン、『所有的個人主義の政治理論』、藤野渉、将積茂、瀬沼長一郎・訳 226頁-248頁

(3) マクファーソンは、ジョン・ロックの所有理論がホッブズの機械的唯物論的人間観に

立脚した、重商主義的色彩を帯びたものであったと分析している。(前掲書)

(4) マクファーソン、前掲書

(5) バークルッ=サドル、前掲訳

(6) マクファーソン、前掲書 65 - 71 頁

(7) マクファーソン、前掲書 306 - 311 頁